

三才児保育の問題



秋田 美子

三才児のカリキュラムととり組んでみたり、三才児の共同研究に首を突っ込んでみたりして、長い経験だけを中心にして考えたり、したりしていたことにたくさんさんの疑問や問題が出て来て、先ず初めからやり直したという気持ちをもった次第です。

個人としての三才児の発達的特長を捉えることや、行動の輪かくを観察していくことから始めて、集団として保育所なり、幼稚園なりに保育していく場合、何をどう考えていったらいいか、そのための計画は、環境は、技術は、教材はということになってみますと何もかもが余りにも不鮮明な、あいまいな状態におかれたままで、何となくたいへんだとか、可愛いくておもしろいとかいう常識的な感想の間におかれてとり残されていたことにも気がつき、改めて三才児保育の問題について考えてみました。

三才児保育の理想的な姿を追う一面と、現状の中で制約されなければならぬ実態から問題を考える面とがあり、いつもこの二つのことが頭の中に引っかかってすっきりと問題を捉えることすら困難な状態におかれていることを痛感したのも、我が国の保育事業全般がまだまだ辛い、苦しい中におかれているからではないかと考えます。

全国の幼稚園の全施設の中で、どの位のものが現在、三才児保育を行なっておられるかの資料が手元にないので何とも申せませんが、全国九千施設といわれる保育所では殆んどのものが、開設当初から三才児保育を行なっている現状です。いわばここ数年來、幼稚園教育界で問題にされてきた三才児保育も、保育所にとっては戦前からの常識であったわけです。

にもかかわらずそれが放置されていたといいたい程の実態の中に
とり残されていたのは何故かという点に触れなければならないと思
います。勿論私の狭い見識中で速断することについては、異論もあ
りましょうし、私としても自信ありませんが、やはり就学前保育
というものの考え方が、就学前、一年、または二年を重視していた
証拠ではないかと思えます。

ところが、最近の人口動態の問題や、幼児教育の考え方の進歩、
施設の普及その他の点から三才児保育の幼児教育の中で占める役割
について改めてとり上げる必要に迫られてきたと見るのは間違いで
しょうか。幼稚園のこうした動きが、保育園をも刺戟し、歴史の上
で先輩であっただけに、また量的に多いだけに大きく問題となつて
きたことは否定できない事実であると言えましょう。

ところが前述のとおり、要求や量的増加に併行して研究がなされ
ていないというアンバランスの中に今日に至つてしまつたとみられ
ますが、最近に至り、特に保育所では、三才児保育と、乳児保育の
問題解決に向かつて研究を進めなければならないところまで、漸く
気運が向いてきました。これは施設内部だけの問題でなく、預ける側
の要求がそれを強く押し進めているとみられる面もあるわけです。

すなわち、働らく婦人の増加と、共稼ぎ、有子婦人の労働、育児
と仕事など近代化された家庭経済や親子関係の質的な変化などがか
らみ合つて、年少児保育の一般化を社会の側でも求めてきているか
らでもあります。

そこで問題が社会的に大きくなつてきている割合に、施設内部の
変革や研究が適合していないことが、いろいろの問題点となつて現
われてきました。例えば幼児の側から言つて、年長児保育の規格や
標準が中心の施設の中で間に合わされている不合理さ、クラス編成
の無理、教師・保育者の保育の計画や実践、或いは技術の研究不足
からくる問題などがあげられましょう。

またその反対に保育者にとつても、労働の強化、混合クラスを受
けもつことからくるむじゅんや問題に対する悩み、研究不足からく
る危惧や、自信のなき、参考資料の不足などが考えられます。

三才児のカリキュラムを研究した際にも、共同研究を始めた際に
もいろいろの問題がそこに提示されましたが、最も大勢から出さ
れた問題としては、三才児の受けもち人数がその上の年齢と同じ規定
で考えられていることや、保育室の条件が同様に殆んど考慮されて
いないということでした。

更に三才児保育を行なっている施設の過半数が年齢混合クラスで
あつたという事実でした。しかもそれが、二才児・三才児の混合で
あつたり、三才児・四才児の混合であつたり、三才児と五才児の混
合であつたり、二才・三才・四才の混合であつて、他は年長児一組
という混合であつたりして、実に一口に混合という名の下に呼ばれ
ても、その中味はさまざまなるものであることから、問題になること
もこれまたいろいろ違ふという実態です。

更にそれが生活指導のための具体的な経験の場でいろいろと混乱

やむりをひき起し、複雑な保育を更に一層拍車をかけてしまう問題も深刻なものがあることがわかりました。その他の遊びや運動の場面で、特に集団的に行動させるような場合の計画や指導にも当然、あいまいさやむじゅんが多く、そうでなくてもはつきりしていない、三才児の保育がいかにいい加減になりがちかという問題も相当強い悩みとなって出されてきました。

教師や保母の努力の効果が余りにも報われないのみか、幼児自身には、集団保育の欠陥の面だけが強く反映しているようなことさえあって、三才児保育の困難さと、現状としてはむりなことをしているのだという嘆息やなげやりな気持を含めての問題提起もあり、いろいろ考えさせられました。

こうした貧しい、困難な現状に足を引っぱられて三才児保育を本質的に捉え、理想的に考えていこうとする態度を見失ないがちなようになりますが、やはり私達としては問題の分析の中から、三才児保育の特質を発見し、或る程度可能な理想的条件を検討していくことによつて、正しい三才児保育の目標や計画や技術、教材の研究も漸次行なわれなければならないということになりました。

三才児保育での無理やむじゅん、放任の状態が、四才児保育の中で、五才児保育の中で問題となつて表われるという実証も、神田寺幼稚園の学会における発表や、三才児からきた子どもに年長児になつて問題行動を起す例が多いという研究グループ員の発表、保育園児の相談ケース事例の中などから、或る程度考察されますので、三才児

保育をどのように考え、扱わなければならないかというこの重要性をしみじみ感じたことですが、こうした評価を基礎にして三才児保育の問題点を現状の中から拾い上げていつて見たいと思います。

先ず三才児にどの程度の集団保育が適当かどうかについて問題を拾つてみましょう。この問題に触れますというより何が問題かを考えると、何によらずやはり発達の特質とか段階ということに突き当たってきます。私達が三才児というものを理解することなしに仕事は何一つ進められないとは思いますが、その特質についてはゲゼルのものや山下俊郎氏の著書が非常に参考になります。

しかしこの基準を實際の子どもに当てはめて比較してみますといろいろ家庭での扱いその他で違いがあったり、日本とアメリカでは異っていることにも気付き、三才児の基礎的な発達の資料を自分達の手で大まかなものでも作っていく必要を、現在に感じ、必要に感じてみていくことや、条件差と発達の関係なども是非考えていかなければならないことだと感じています。

集団といつても三才児に適したグループの形態や人数なども、保育時間、保育日数、さては人手との組み合わせの中で適・不適が云々されるべきでしょうが、常識的にみても、現在の保育施設の何パーセントが適したものであるということが出来るでしょうか。

クラス編成だけからみても問題山積の混合の場合を除いても、一人の保育者で三才児三十数名をもっているものから六名位のものまでの開きがあり、一応これまた、経験論でいう十五名程度というもの

は保育所の場合、半数にも達していないわけですが、保育の効果を挙げるにはどのような編成が良いか、受け持ち側の負担よりも子ども達の保育効果ということで見直されなければならないと思います。

一日のプログラム、保育時間、保育日数などについても問題はあ
るわけで、とりわけ保育所のように年齢の低い子ども程、早朝から
夕刻まで長時間、施設の中におかれる率が高く、しかも、年齢の高
い子どもの休むような時でも自立できていない危険さが、これを保育
所に任せられることが多いことになりました。

このような実態の中で、問題になることは幾つかありますが、疲
労、個人生活の尊重されないことからくる情緒的な問題、性格への
影響、遊びや生活の固定化の危険、おとなとの交渉の特定化などが
あります。

次に設備の点からみましても、生活の場である便所、手洗い場に
例をとってみても、殆んどが兼用であること、数が少なく適当な規
格でないことが考えられます。三才児の生活指導の場としても一応
別にする必要はある年齢だと言えましょう。いつか三才児の保育経
験で名の高い、或る幼稚園を參觀した折に、便所へいくのを待つ行
列の三才児の1/4位が指やエプロン・ハンカチを口にくわえたり、な
めたりしていたことをみて、指導の技術以前の問題がかなり研究さ
れている施設ですら出ていることをみて、設備の不適當なことがい
ろいろのくせや習慣を育ててしまうことに気がつきました。

同様に手洗い場のコップなめやミルクやお湯を貰う時の待つとい

う生活の中で、三才児には集団の大ききとしても設備としても、考
えられなければならないいくつかの点があることもわかりました。

椅子、机、遊具、運動具も屋内・屋外をとわず種類、規格ともに
考慮されるべきで、数の少ないことも物によってはあることがかえ
って困るという実状も出てくることを知っていなければならぬとい
います。けれどもさてということになりますと、三才児の集団の
大ききや環境全体の中で制約されることもあり、かえって効果的で
ある場合もあって一概にこうとは言えませんが、少なくとも現状で
は三才児の運動や遊びはかなり制限をうけたり、中止させられたり
していることが多いことは事実です。

また、それ以上に現状では年長児重視の風潮から未だに脱却し切
れない施設もかなりあって、遊具や運動具も年長児のセコハンのな
ものを与えられていたり、当然数も少なく、質も粗悪なものが与え
られ「どうせ直ぐにこわすから」の立場から物を与えられている例
も少なくないよう三才児に適した物的設備の研究も今後に残され
ているようです。

休息や午睡の設備にしても、胃袋の小さい三才児の給食や間食の
問題にしても、現状では年長児のそれに併せて行なわれています
が、理想的には当然別に考えられなければならない部分があると思
います。

保育の目標としては、年間の中で月齡的に発達差を示し、前期と
後期では行動的にはっきりした相違を示す三才児として、年間の変

化を把んだ上で年長組まで至る間にどんな段階をふんでいくべきかを一応頭において樹てるべきだということはわかって、きて、何と何をとり上げるかになると、基礎資料がすっかりしていないとむりをしたり、反対に低きに過ぎたりしてしまうのではないだろうか。

基本的な生活習慣については文献もあるので比較的目標を樹てるのに困難ではありませんが、遊びや言語の指導、更に集団生活への参加の意識をもたせていくための社会性の指導などとなるのかなりあいまいになってきて、うっかりすると四才児のそれをおろしたものに考えがちなところもあり、受け持ち数や設備の貧しさを痛い程感じていながら、一応まとまったものを挙げてしまうことが問題でしょう。

保育の計画や技術については、家庭からの移行段階にむりのないよう、特に情緒の安定を欠かないことを、という位の常識はあっても、更に発達を助長し、長年保育としての効果をどのように挙げるかという段階になると問題点の多い施設の現状からは簡単に適切なものは求められないようで、今後の研究にまたなければならぬと思います。このように未開拓であるばかりか、問題の多い三才児保育も近年漸く陽の当る場所に出てきましたので、今後の研究によって次第に問題解決のいと口は解明されてくると考えます。

現場の苦しい中でも保育実践につながる研究はささやかながら、するつもりなら出来るものです。一つの施設の数年間の記録の中か

らも問題解決への道は発見出来ず。私の園でも十五名のクラスと三十名のクラスとの場合を比較して幾つかの問題発見が出来ました。

例えば人数の少ないクラスでは、①泣くことが少ない、②但しけんかはかなり多い、③自分勝手な行動が多少あるが、ひとり・ひとりが自分なりに生活できる、④積極的な空気があり、よくしゃべる、⑤友達が出来る、中心的な子どもが目立つ などの特長がみられました。反対に人数の多い時は、①泣くことが多い、②けんかはあまりないが問題行動は多い、③まとめられることが多いので集団で先生と一しょにすることは従う、④その反面、時によって爆発的に混乱する、⑤言語表現が少なく、消極的な態度の子どもが多い、⑥年長児と一しょの折などおとなしい、⑦友達のもてない子ども、遊びに入れない子どもが目立つ などに気がつきました。勿論これは保母も違った人が担任していますし、子どもの年齢その他の構成も異っていますのでそのままのみには出来ませんが、三才児保育の問題点を幾つか含んでいるわけですし、研究への手がかりも得ることが出来ます。

集団保育としての三才児を捉える意味で私達はささやかな共同研究とおして地固めをしようと努めています。時々かえって解らなくなるといふ難関にぶつかりつつ、現実の保育の中から問題を掘り下げ、保育以前の問題にもとり組まなければと考えています。

(白金保育園)